# ダーウィンの進化論

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長　田中　宏

「最も強い者が生き残るものではなく、最も賢い者が生きのびるものではない。唯一生き残ることが出来るのは変化できるものである」

イギリスの自然学者である、チャールズ・ロバート・ダーウィン（1809-1882）が残した名言です。

1987年に藤田学園保健衛生大学（現藤田保健衛生大学）衛生学部診療放射線技術学科が設置され、診療放射線技師養成大学が初めて開学しました。1991年に鈴鹿医療科学大学が日本放射線技師会（現日本診療放射線技師会）（以下、日放技）の主導で設立されました。医療に携わる者は、今後将来、国民のだれもが認める学位を持っていなければならない」という考えのもと進められたのです。もちろん、私自身各種学校卒であり、当時の日放技の方針に強く賛同したのを記憶しています。

しかしながら、意外にも周囲の反応は賛否両論でした。「各種学校卒であっても、大学卒であっても診療放射線技師の資格に変わりはない」「仕事をするのに学歴は関係ない」というのが反対意見の大半でした。あれから20年以上の歳月がたち、今では、「医療に携わる者は学士どころかチーム医療に対応するためには修士が必要である」という社会の流れになっており、答えは明白です。

平成22年に厚生労働省医政局長より「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」の通達が出されたことは既にご承知と思います。その通達内容は「画像診断における読影の補助を行うこと」「放射線検査等に関する説明・相談を行うこと」とされております。本会では「読影の補助」に関しては一次読影を行うこと。「説明・相談」についての対象は患者、医師、メディカルスタッフへの説明・相談であると考えています。さらに、今年は診療放射線技師法が改正され、「造影剤の血管内投与に関する業務」「下部消化管検査に関する業務」「画像誘導放射線治療（image-guided radiotherapy: IGRT）に関する業務」が新たな業務として加わりました。これらについても周囲は賛否両論です。その反対意見は、「レポートを書くのは技師の業務ではない」「レポート書きまでやっている暇はない」「抜針を行い何かあったときはだれが責任を取るのか」「余計な責任を負いたくない」というものが大半のようです。この20年以上の歳月のなかで、医療での責任は医師だけではなく、個々のメディカルスタッフの責任が徐々に大きくなりつつあります。世の中は明らかに医療が変わることを望んでいます。言い換えれば国民が望んでいるのです。その世の中の変化について行けない者が、いわゆる「変われない者」ということになります。そして、それはいつか時代により淘汰されるのです。

変わるための道標を、私たち診療放射線技師会が担っていくべきものと考えています。